日本と東アジアを結ぶ汎アジアの「和」の精神

村野謙吉

「世界は夢・幻・泡・影・露の如く雷光の如し。このように現象界を直観すべし」(「金剛般若経」)(1)
「打つ人も打たるる人も諸共にただひとときの夢の戯れ」夢窓疎石

現在、世界は未曾有の歴史的混乱状態にある。
自由と秩序が互いに相剋し、様々な特権を持つ少数の「打つ」人々に占有された「自由」が多数の「打たるる」人々の「自由」を支配し、世界には複雑極まりない対立・謀略・偽善・不信・情報操作が渦巻いている。

さらにトランプ氏が今年 (2025年) の1月20日米大統領に就任して以来、彼の破天荒な政治行動に、世界中の政治家や経済人が翻弄されているようだ。

しかし彼が経験を積んだ二期目の米大統領として登場したことによって、積年の隠されていた米国を中心とした“深刻な世界の諸問題”が鋭角的に露呈されている一面がある。

さらに西欧の価値観を中心としたそれらの“世界の諸問題”の情報が、大衆に普及したパソコンとインターネットとの結合によって地球的規模で多くの人々に共用され、様々に解釈されて重層的に複雑化している。

鑑真大和上（唐招提寺）↑

しかし、自分の歴史的具体的立ち位置を考えずに、世界の諸問題の共時的現象面に執着して、それに翻弄されていては “深刻な世界の諸問題” の本質が見えてこないだろう。
そこで、世界と日本国内の政治の喧噪から一旦距離をおいて、日本に生まれた幸運に感謝しながら、通時的視点から “守るべき日本の伝統の本質とは何か” を思いつくままに記してみたい。

＊＊＊

10年ほど前から、私は古代から現代にまで縁起的に連続していると考えられる日本的価値観の本質に関心をもって、飛鳥、出雲、隠岐などの各地にある神社仏閣を訪れている。神社仏閣は伝統の維持装置である。そこでは、建造物から樹木に至るまでが自然と一体になって実に見事に掃除が行き届いている。日本国民に「掃除の美学」の手本を示しているかのようだ。

私は、訪問先の各地で、地元の人々と少しでもさりげなく言葉を交わす事にしている。
どこにいっても、道を尋ねた歩行者、売店の女性、各駅の駅員、列車の車掌、タクシー運転手、みんな親切で礼儀正しい。新幹線では、切符を点検にくる車掌が乗客に一礼してから次の車両へ移ってゆく。

これが「礼の伝統」ということなのだろう。このような伝統の歴史的由来はどこにあるのか。

ある年の９月の夕刻、京都で中秋の名月を見ることを期待して天皇の「御寺(みてら)」に参った。境内地の一角から清水が湧き出たことから泉涌寺（せんにゅうじ）とも呼ばれる寺だ。

曇り空であったが舎利殿の縁側にたたずんでいると、いつの間にか雲間から見事な満月が現れた。
皇室の菩提所である真言宗泉涌寺の開基は、宋で12年間修道した俊芿 (しゅんじょう) 律師であり、後鳥羽上皇をはじめ天皇・公家・武家などから帰依を受け、北条政子と北条泰時は彼の下で受戒している。

泉涌寺には1230年、南宋より将来されたと言う「楊貴妃観音」像が安置されている。玄宗皇帝が寵愛した楊貴妃の冥福を祈って造像したとの伝承のある像だ。見事な美形の観音像に、善悪の上位理念としての日本的美意識を感じた。

楊貴妃観音↑

私のささやかな歴史探訪は、伝統的神社仏閣に限定されない。
天理教の教会本部の神殿を訪ね、そこに暗示されている宇宙観に新鮮な驚きを覚えた。

宗教法人大本のある亀岡や綾部も訪れた。綾部では一千年の耐用を考慮して建造された木造の神殿で、300畳敷きの拝殿広間に、秋の夕刻一人佇んだ。

そこでは、伊勢神宮、出雲大社、明治神宮とも、靖国神社とも全然違う、また仏教寺院とも違う、いわく言い難い暗示を体に感じた。

日本の神社仏閣に漂っている、この自然と一体の伝統、この安らぎを支えてきているものはなにか。

＊＊＊

鑑真御廟　↑

ある年の10月、私は奈良を訪れ、鑑真和上 の創建された唐招提寺に参拝した。(2)
大阪港を出発して上海に向かうという20名ほどの日本の大学生たちと一緒に、律宗管長の西山長老から、鑑真和上のこと、故鄧小平が副主席の時 (1978年) 唐招提寺を訪問した時の興味ある逸話などを拝聴した。

鄧小平氏は鑑真和上の御廟（墓所）の前でどのように振る舞ったのか。仔細は省くが、驚くべき丁重な仕草で鑑真和上に最上の敬意を示したという。

唐招提寺は、日本仏教文化の精神的礎石であり、当時世界の大帝国・唐王朝と列島の皇国・日本の外交的信頼の媒介点である。唐と日本との間を遣唐船が往来していた。唐王朝は長安 (現在の西安) を都に、東は遣唐使を通じて日本と交流し西はシルクロードを通じてローマとも通商していた。

＊＊＊

752年4月9日、東大寺大仏殿で開眼供養が行われた。
日本列島に初来日したインド人僧・ボーディセーナ師が導師を勤めた。
しかし大伽藍は建造されたが正式な仏教の「サンガ (saṃgha)」(「和合僧」ブッダに帰依する出家者を中心とする「信頼の和」の組織) は未だに成立していなかった。

753年10年15日、玄宗皇帝は、日本の遣唐使の帰国に際して五言の詩を与え、在唐中の阿倍仲麻呂は揚州の鑑真のもとを訪れて日本への渡航を請い、鑑真の承諾を得た。

753年12月20日、揚州を発って帰朝に向かう4隻の遣唐船の第三船に乗った鑑真一行が現在の鹿児島県坊津町秋目浦に漂着。その後、一行24名 (僧14名、尼僧3名、ソグド人 (イラン系)、インドシナ出身者らを含む在家信者7名) は軍事・外交を主任務とする地方行政機関だが外務省の機能を持っていた太宰府に滞在後、船で瀬戸内海を通って難波津に翌年2月1日到着した。

鑑真は、皇帝に命じられたのでもなく、率先して発案したのでもなく、当時唐の政権に仕えていた阿倍仲麻呂や在唐中の日本の僧に乞われるままに訪日を決意、そして決意した後は命がけで行動し5度の渡航に失敗したが 6度目の渡航を試みて、失明して来日した。

来日した鑑真には、異国の精神的伝統を破壊するような西欧流の征服的宣教の意図はまったくなかったし、政治に介入する意図もなかった。

754年4月初め、東大寺大仏殿の前に築かれた戒壇で、鑑真によって正式な仏教徒となるための授戒がおこなわれた。
最初に聖武太上天皇、光明皇太后、その娘の孝謙天皇が順次受戒。その後、440人余が受戒した。
かくて鑑真和上の下に、男性僧、尼僧、男性在家信者、女性在家信者の四衆からなる日本の仏教教団の基礎が、天皇家の参加の下に成立した。

ちなみに「戒律」の根本的意義は、受戒者の主体的な慈悲行と集団における「和」の実践にある。

この年の秋、阿倍仲麻呂は日本に帰国する遣唐使船に乗船したがベトナムに漂着。現地人に襲われ多数が殺されたが阿倍仲麻呂は無事であった。しかし彼が落命したという噂を伝え聞いた詩人李白は七言絶句を詠んで仲麻呂を悼んだ。「明月のように高潔なあの晁衡（ちょうこう：阿倍仲麻呂の中国名）は、青々とした海の底に沈んでしまった！」阿倍仲麻呂はやがて長安に戻り中国で生涯を終えることになる。

755年、大仏殿の西側に授戒を正式に行う戒壇院が造営された。
同年、中国では安禄山 (705-757) が玄宗皇帝の政権に対して反乱を起こし「安禄山の乱」があり、唐帝国は複雑な内戦状況となった。安禄山は西域サマルカンド出身のソグド人と突厥の混血であったが、貿易で唐王朝に参入し、玄宗の信任を得、さらに玄宗の側室の楊貴妃に取り入った人物である。

756年5月2日、日本では聖武上皇が崩御。皇室は上皇の看護に勤めたことに対して感謝し、二人の唐僧すなわち、鑑真には大僧都、法進には律師の任を与えられた。

757年、一時は首都長安を奪った安禄山であったが、病に倒れ失明してから凶暴化し、次男の安慶緒によって殺害された。安禄山の動乱の最中、杜甫は「國破れて山河あり」に始まる名詩「春望」を詠んだ。
758年、鑑真に「大和上」の官位が授けられた。
762年、玄宗と李白が亡くなった。
763年、「安禄山の乱」は一応の終結を見たが、それに関わる双方の死者数は1300万人から3600万人と推計されている。

＊＊＊

鑑真 (688-763) が来日前に生きていた唐代前半は、日本の阿倍仲麻呂 (698-770) が玄宗皇帝に信任され、詩仙・李白 (701-762) や詩聖・杜甫 (712-770) らと交友を持って活躍していた時代であった。

阿吽の呼吸の如く、来日した唐人の鑑真は763年日本で入寂し、渡唐して在唐５０余年の阿倍仲麻呂は770年中国で生涯を終えた。同年に杜甫も死去している。

＊＊＊

鑑真と阿倍仲麻呂の間に深い信頼の心の交流がなくしては、聖徳太子が基礎を築いた和国の政体の下に仏教教団の基礎は築かれず、仏教は歴史的に日本に根付かなかっただろう。

もし鑑真が、日本を精神的に支配しようとして仏教を世俗的手段として利用したとすれば、日本に固有の神道的なるもの、自然に対する豊かな感性が否定された結果をもたらしたことだろう。

最澄 (766 - 822)も空海 (774 - 835)も、それぞれに唐に留学し、帰国後は鑑真が伝えた具足戒を受戒して正式の仏教僧となって活躍し「平安仏教」を日本に確立させた。
平安時代は貴族文化の時代でもあり、これが後世に発達する日本文化を支える基層となった。

平安仏教無くしては、源氏物語も平家物語も方丈記も徒然草も生まれえなかった。
平安時代後、舞台芸術としての能も歌舞伎も成立しなかっただろう。

俊芿 ↑

最澄 (先祖は後漢孝献帝の末孫・登萬貴王) が比叡山延暦寺を建立し日本天台宗を確立しなければ、そこで修学した栄西、道元、日蓮、法然、親鸞、宋にわたって12年間修学した泉涌寺開山の俊芿、さらに七朝国師と尊称される夢窓疎石などの鎌倉仏教の祖師たちは生まれえなかった。

1279年、無学祖元が南宋から来日、鎌倉に円覚寺を創建して北条時宗の心の指南役となった。彼無かりせば中華帝国を打倒した元軍による1281年の2度目の日本侵略に時宗は精神的に耐えられず白旗を上げて、その後の東アジアの歴史は一変していたかもしれない。

インド文明発祥の「仏教」が中華文明に移入され、中国の英邁なる僧侶たちによって実践化されて仏道の原型が確立され、それが日本において「仏道」として定着し、日本の「和」の伝統が育成されていった。
飛鳥期、奈良期、平安期、鎌倉期を経て大衆にひろまっていった「仏道」がなければ、今日伝えられている様々な「道」の日本文化は成立しえなかっただろう。

夢窓疎石 ↑

日本文化の「道」とは、具体的な身体行為をもって一定の理念を不断に探求していく自己修練のシステムのことだ。この「道」に身分や出自の差別はない。求道者は、それぞれの「道」の師に対する「礼」の志と不断の向上心と修練のみが要求される。
しかし「道」には必ず「遊び」と「楽しみ」の要素があるので「道楽」と言われる。

＊＊＊

日本人は、「仏道」を起源とした「道」のソフトウェアーの原型が与えられたことにより、茶道、香道、華道、剣道、柔道、歌道などが生まれていったが、それぞれの「道」には必ず善悪を超える「美意識」にもとづく「礼」がある。聖徳太子の意図した「和」道における「礼」の原意は「南無 」(ナマス (namas) の音写、意味は礼拝)である。
武道でさえも「礼」に始まり「礼」に終わる「美意識」がなければならない。

豆腐、味噌、砂糖は鑑真の来日で伝えられたが、日本人は中華の調理法を学んで、日本列島の豊かな清水と多様な魚貝類を素材として盛り付けし「形の美」を持った「和食」の様々な「道」を工夫していった。
和食では「いただきます」の言葉と合掌が「わたし」を生かしてくださる食物に対する「礼」である。

＊＊＊

鑑真律師は、釈尊在世時に制定された正式な仏教僧になるための完全な戒律である具足戒を受戒した僧であるから、南方アジアの僧とも仏教的行動規範の基本を共有している。

鑑真という人格は、インド、中国、南アジア、東アジアを包む汎アジアの精神的価値であるが、鑑真の仏道が日本に定着され得たのは聖徳太子 (574-622) の「和の国体」がすでに確立されていたからである。

聖徳太子の意図した「和」は安易な性善説に基づく妥協ではない。
民族や職務上の区別は認めて、そこに差別を是認しない、普遍的な人間平等の精神である。
「憲法十七条」は基本的に責任ある公僕のための行動と志に対する戒めであるが、何人も尊重すべき、不正に対する不断の批判精神である。

「悪しきを見てはかならず匡（ただ）せ。それ諂 (へつらひ) 詐 (あざむ) くものは、すなはち国家 (あめのした) を覆(くつがえ)すの利 (と)き器 (うつわもの) たり、人民 (おおみたから) を絶つの鋒 (と) き剣 (つるぎ) なり。」
（「憲法十七条」第六条）。

現在、世界中の人々の生活の隅々までが膨大な量の「金融と電流」によって支配され、大量生産された物資が大量輸送され、大量に利用され、大量に廃棄されている。

「量の唯物文明」が人々の価値観を支配し、機械的平等主義が横行して道義的カオスの状況が進行している現在の世界は、有史以来未曾有の様々な伝統的価値観の大混乱期にある。

自らの民族と別れて外国に行き、しかも異国に生きて母国への郷土愛を忘れず、物欲と政治的支配欲を超越して誠の心を持って異国に仕えた鑑真と阿倍仲麻呂は、日本と東アジアを結ぶ汎アジアの輝ける精神である。

日本人よ、アジアの善民よ。
世界に蔓延る「量文明」の価値観に基づく技術文明の発達と成果の功罪を正当に評価しつつ、
人類の歴史を「夢の世界観」として大観しようではないか。
東アジアを超えて世界の善民の指標となる「和」の心を深めてゆこう。
善悪を超えた「和の美意識」にもとづく価値観によって行動しようではないか。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

(1) 「金剛般若経」：サンスクリット語の原名: Vajra-cchedikā-prajñā-pāramitā-sūtra（ダイアモンドのように素晴らしい智慧の完成を説く経典）：漢訳（中国語訳）具名「金剛般若波羅蜜経」。
この引用文は「金剛般若経」の最後に置かれており、ブッダが縁起の「空」であることについて最も優れて体得していた仏弟子のスブーティ（須菩提）に語った言葉である。サンスクリット文とその漢訳を参考に筆者が適宜に意訳した。

(2) 「招提」はサンスクリット語 cāturdiśa の中国語（漢訳）の音写で「四方」の意味。そこで唐招提寺は「唐代 の律師によって開基された四方に開かれた寺」である。本尊は毘盧舎那仏（サンスクリット語「Vairocana Buddha」の音写）で、仏像の大小に関わりなく唐招提寺の丈六（約４.8m)の本尊と東大寺の座像の大仏 (約15m) は同じブッダである。

(3) 本文の一部の歴史的記述については『対外関係史総合年表』(吉川弘文館)を参考した。

＃　本文、引用文、一定の内容などについて、筆者の意図しない誤記や誤解などがあれば、ご指摘を受けて、感謝をもって訂正したい。

(2025/05/25)

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

村野謙吉：仏教、日本文化、ジョージ・オーウェル研究家、翻訳家、コラムニスト（Mainichi Daily News [英文毎日] 1978 -1983) 他。訳書：ヴィンセント・スティアー著『プリンティングデザイン・アンド・レイア ウト欧文書体とレイアウトの常識』（情報・出版研究会）など。